源氏凡卜　下

六七

凡戸

下

源氏九下巻第六

あ

一あらくしく　ぬるむちどろ云ふ也　一あられたる　あられたる

一あらもど　不慥なる也　一あらたまる

也又ありもろきもとと云ふあられと云ふ也ぬ

ゐるべき也

一あちさあう　一あつまる　強愛

一あちさあう　一あへまく　強墩

一あちぐち　一あらき風　あをさしと

一あやし　一あらき

いやしき人の子小義は源氏九下巻紀はさぶ

ちゝんあさまつりごと　一あさまつりごと　春霞
若鶯　鶯　月高起　後此君邦　不早朝　長恨哥
一あさがれの　禁中　朝餉の間とて二房あつぱ
みてはこの膳を　朝夕　早朝まいるも。常の儀式
まはあらず　御供も。箸とりふとよとくもづり
てあまくさゆつるも。つさと箸をおろしとゝ
ゆとゆつゝ　おとゝ　ゆとり
一あさくれ　九月　一あまくさびくさゆき
源氏　こゝろうどうれと　高　高
一あくしられと　あくゝゝゆとゝ　高

一あくゝ　不足くゝあも　一あくさくさ　あくさ
くさゆも。縱　横　くさゆも
一あざやく　あくゝゝも　一あやちき　錦　綵
一あくめて　一あくゝふ　あもゝ
一あま　昔ゝれあまくて。ぬるゝ　髮　ぬ
さひくゝがこちどくさてあまゝちゆも。さびあま
ゝあくゝあもゝ。ぬるあて　いる
一あゝあざのゝ　あちきちれくのゝとも
一あくれ　あくゝも　一あくて　散　散ゆる
一あゝゝくゝ　くれとのちどくや

一あへまーあやうしまーせ。おくへ地とゝへおやう地

一あざれ　される色　一あくまて　不愛も色

一あへうもう　八雲　うけうーひとびとよう云ん色

一あさてさきと　俗よあくべあきと　いつよ同しあ

くるとゝも

一あいぎやう　愛敬　一あざめ　組せあくる色

のゝあひのゝとれめとゝ云也　一あやめとゝゑ　綾間　地

一あふう風　うまーさうのんもり

一あるー　猛食也　あうまいをもいつ也

一あてやう　あてやうふうひうーさん色

一あうん　紀伊也　紀寺をあげて　源のうひうう也

一あてべ　貴人也　一あと　階子　梯子　小さ

とゝ云女をとゝ　ものとうりてあとゝ云也

一あうけー　あへーあきあんあさんとゝ云也。

はきをーはよふひうれてうる河也　ひくうもく

つけーあざゝ云ごとー。めける多

一あやうく　あいすくも　一あさうあくくうる

一あざり　阿闍梨。安恵内供奉。慈覚大師弟

子。天台座主第五。始補阿闍梨

一あうんて　きちくうんや也　孟津馬ん色

一奇あさ夏の　源氏のいそぎ出るふぜい　[illegible]
とまりくるまと。近人のるすをいひるすも

一あるい　素問也　一あるまとそうくはう

一あるまとそうくはう　朝露　貧名利　夕陽
愛て日源　白氏文集　諸院より別當
あげうさる

一あるいうり　一あるぶれさり　あつ〳〵き
也又あまくさうん也　一あるとろ〳〵に　そとあ
むとあるも　一あれあるうりも　さげ
ろうもとは如雨脚と治ることろん

一あさむうれ　鞭　ぶまきれめべきさのんも
一あるうき　一あるうこ　穴賢　あるうこぶけちとえんし
一あるうこそまうり　陶伽　梵語也　水と翻ぶるも
一奇あさる　まへの泊よ　弘波浦　とこいへぶそのえんよ
ひりぷけもちるうんようんぶとりるせうぷ奇
のんうこ。遠ざうるとうけとあるとうんり
一奇あるうれ　芦の素　れるうそぷうれ浦を
芦々の浦とはひり。ぷこは立まぶ〳〵ぷれは立まぶ〳〵
こいんまうてはうるぶとも
一あるうく　おあ南のあるぶうそそうるも

一あるさい　ねれね
この行りこれのる花のるる　あるずせいのぷ　ぷるるずか
どいつづごとし。今物のるるりぷのわりハ　ハかいいろ色さいふ
せ。ぷいわりこのむとは。影俤　奇こり出るる河也。又
るらのれ花ひるで梅の花といへるるをまるあや
まれるるるべし。この河よんでこう
一あるちん　そのまるあるべるんとのるる也
一あるれるるる

一斎つきうはほそ殿のそ
るとつるゑもとうぐられ結あてあれべったうと
あるべ
一あるひろのもとうもれさう
下もぐれ花九車ハ唐庇檳榔庇毛車ホハ尺
ゐ。桟榔とりてふく。尼肩。本鬘。綱代ホうけぱ
あ。ろとまたりぱ今ハ息ホのあ。ろハぱづれと宮う
ゝ位尼眉ゑハあ紙ホ濃のトもぐれとうくあ。
ろの車ゑハトすぐれとうけもといへど。女房の車
用ともるゑハ八重の車ゑとトすぐれとうるゑ
ゑはれぱいろれゆてとお遠ちうべ。ぱとうもれ

一扇のつまゑ紙ありて。桟扇
一わさうや　さちんと
四ゑハ。泥中ゑあるゑ紙ゑありゑの地。ぱとうり
まてハ。山四のそうびもあるてんうあり
一ゑとちりうもとやちり文選平山祇女朝為行雲
暮為行雨　一あゑむまづりで　中ゑ
へ引治也。寶亀六年正月天皇御楊梅院
安殿設宴於五位以上既而内庭宴進青馬
馬　略之河海妻　一わ紙ちうき　はゑ治ゑ
秀逸と。後成の女房也。そちうれつれちうまう

せバ消のミなに三つむとめや。玄宮やうよいひるーまと
一あきの秋のあまどひ　ゑの様也
一あさり　水食　一あき人のちろゆてこに琵琶行
長安倡女　学琵琶於穆曹二善才年
張色裴秀女集為商人婦
一あるとびとこと　極ミ　ゆべー
一あるまれ　童の馬牛飼也　ゑの絵角ちろよ
てや。童の遊ぶ也又車みとこと
一あべのあるーう　安陪多　竹丸勢繪ニ略之
一あるうろさとうーうろさとれのうざこうさこハ童女のよろ

ろ池也。水千代のこのやうちろ池也。御殿のうつぎに。
梅ぐさひのうざこ。紅ぐさ　ぐきれハ法花　袖也。ちこゆハ二ともこ
もうさめろ池也。ぬうさ　れハ面うと也。裏崩　ぎと
一あまぐひ　ちとのるやこ。三歳まで用て。法ちる
るを見よ　ちもあまもと天　兒
一あひ　知
一あるーあて何ゑは人の
うへようろとうーぐにろ
ろといろ
一あこ先　袖
一あぐけ　化
一あるぐゆて反ぐるようり
給六位のハ緑の袍。あさぐといろ。反ぐーてう。

又元服をすんでより後とをすんでより。地下へ立
ゝる儀式元。一世源氏よりハ。そ。縫殿又位下なれ
ばあけの袍をゆるし元事
一あぐまりのこと　学生の入学の時。文章院の堂
盥を書くぐす。名簿をあさらかとをきも。聖廟の
字ハ。菅丞相。三善清行の字ハ。勤行とゝ。ゆ。ゆ
の字を添ゆ。ゆ。ゆ。

きべ。白やうるしぬやうきこうのわりへ。紅のうの縁也

一あつりみつり　鄭の字也。ぬくいあるくもあるさ

いるこうこうもの。青やうけれ紗綾也

一あつこべとうみつり　を

あつこうるたこあつずあるあつ我が上にまつぐきもあつ

此等一首ようこうべこうこうす。ぬこうして駕まれ等よあつべ

と云河と。好依由られ。やもとめ面の中此文字よりもし

私動　古今忘五枝とへべうこうこうこ

ひすそを出す潔ふる物云べし

一あつぐちちるれ　云愛達世俗あつてそちれといふ

一ちそんやさやうれあちまの

一あまへるたさる也　あま

よ用

一あうねさす　月代異名也

そぐに義風脇也

一あしぐぐらの名ちくへ

つくのさうる也

一あもまひ　歩行也

古ちぐちひとりくうしひ

ひふみよいむなやこゝのとをと表じるまちん

ひ奇ものべ脇者の後あて内方れ出女乃くり

あくりくるる也

一あさ日さす　天子を称日

三ヤリ乃へ

文仕ようあ給たぶ。我を三給ふる也

一奇拙くれと　ふけちちるべきは鏡と紙ようとき

系也

一あ代みひのさ一めさ弄

問くくれのさ一めさやゝ。綺きひ赤ふも織れ。同

きめのさ一めさはつくやくちる時用べきえ。一動

風流の時用系掾解也。合戦一禅也

一あもの名わるび　蒙モギ云ようは粧ふるべきちり

一ありてくる云　あ一での名イロ系ハ。芋の系のちり

よ文字とある也水石ミツイシとあるとき書ちすちり

一あさのうくさみを　俗馬系の奇れ芋拙ノウキのうくにちや

みとうとふこやてと云と。弁少将ふくえれされぐダ

あれ我はなやまさあれ物とぞまうけまうければ
こんぬ也。それをなやれあるそれをとゝちぐけっぺてで
きやうあれ也ひとと女のようる事也
一あさみどり　淺緑はかぶ袍ちり。はかぶ位上袍
一あをきあるきまるとゝ　白橡よこ二ゑゝあ
をきとし靜久あるきはかぶちりとをよつるだゝ
はつゝきるたゝひるとえゝちりとゝ得めるも也
家中、舞童のわ家衆とゝりたい赤ゑゝとゝ
ゝとゝとゝたゝはまゝゑゝえび源のたゝきひも
一あとゝあるよとゝ　秘曲とゝのゝも也

一あゝろの車れむうしはゝて者の所あひあるき
ゝ。弄次たゝる
のゝ面ゆべし
一あるきゝるゝあゝて　老者
一あるゝゝゝ　清土みて也
一あるゝゝあるれのゝ　あるれとはゝるれ也車れ
る也　一あゝまあゝひの　糸
のゝ也　和琴を用也　一あ糸みびのあるてあるて
折数の面よ強ゝ　ゝるゝあ也。尾ちれゝ也
一あゝゝのゝゝゝゝて花ゝ伝あ糸也。ゝ殺
のゝ也　磁ゝはゝ業碗のゝ也。ゝゝゝて仏ゝる絶

也。栗毛襲ぶれ
の名ぶたりとなり
あをりいうのぶ也。舟ハ濃まそ美をさ
ゝる也云々

一あこうくうちく 出ル
一あをの柳乃うざゝ花
一ありさゝ也 上代のゝ也
一ありさゝ也云々、花のゝゝ
ちゝつるぶゝに対を
世間を不寧間。如泡沫煙 法花経
一あうさあのさゆゝやうゝ
一あうさあうきしゝうさぶのゝちを みゝ蓮
花也
一あさ蓮のゝれ経
一あのゝのけ乃ゝ 出ル

のあゝゝゝる也
一あゝ云馬ゝゝ
猶馬 移の鞍。位月の祭馬ゝをく也
一幻あゝ花 仏ゝ時花ゝて時ゝの花をなゝる也
一あちんがひゝう大海の釈迦仏入涅盤之後阿難
経文豆高座説集法経之時其形ぬ仏仍衆
會疑仏経出給阿難未證悟位之人也仍阿羅
漢ホ不用之其時阿難自然現瑞
一あゝれてゝ 非天つゝる人ゝ命をゝく孔雀
ちゝへ也云ゝず也一あゝとたゝて八ゝ世のう
ゝに宿をゝゝる。真実ゝのゝむ仏ゝゝ

あらねどもも
日つの会はるや
べる所物へ　医房繼日本記三十五日後晨
所と勢也
一扇のさきはるもの　扇
一ものさしをもてはかる
也　月隱重山今　撃扇諭　朗詠
一あるじろ　細代江列　田上ものとりれらをとれり
一あるじろ扇風　昔八島ちとのためしき細数
世定るもの。凝肯　面を削て細絶ゆ　閉会

世ろ拍ろう。蘇長扇用とつり。又ひあしろの扇
用と云拍ろ元。車付ひあしろハ行をとろ拍ろ
一あげまうなよ　大ものとまろひあひ交の色辭
馬系の奇をれて漆り
一あるじろ　蘇竜　文選ちとてあしまろで
あろ　一枝ちろ　枝ちろとも
あびろ
一ものひてを　変ろ色一あるまぎ　高縫也
一あるこれひざろ　花柿下紀伊出ものの海。岩
山十二年山を出で。凝肯　帝苦行をとろ

りて西伝寺に伝授十種師より補をこれうとこと
一うき舟 あぶらふちん 寝殿 殿の彩色より作とも
一あつりとうの絵 御泥 黒色也
一ふなとこ 浮舟の月をちぐ一吸月也 ぶな
の月 浮院 ウビ 西伝院 伝教浮舟をとゝ付しも
一あつらへ かり 新注めく也
一ちくれ ちく 浮舟のもをとうひゃくと
ハ知ちぐ ぐまでちくゆへとうり
一あつまとこと うちよへ 精霊 カナ 霊也
一あぶらの 根 ネ 笹 ニ あぶちとこんちと

一秋ちの 山 舟 明 色 の家 ニ そこあしぶ宿
の家 ニ そこ ちぐ ニ 宿 よかこん
ちとこり
一おまよ 衣 ましせの 形見 カタミ
丸 油 とおま 衣 ちりわる 月 みやこけて 歩 んとこり
一あぶの山 根 ネ 笹 ニ 名 ニ 衣 山也
一あいこう 愛 イニ 執也

さ
一ぎうし 鬱 ボツ 深 ふか 房也 一さほう 蓬 サウ 也
一さうう 賢 サカシ 一さうぐく 装束也
一さうくしさびしさも 河 カハ 寞 ヒク

一さくうき 琴詩 方さやくんも
一さんぺいやうよんも。さうはのん
一さとう さとうやも 一さうんうつかれると云
一さうぐるくて 悪也
一さうえん 柱也
一さうこい ようで きそ 侍とも度とつかも
一さうこと おこみき 根のけんくよんひこやまた
人はかりあるかるかるかるかるかるかるかるかるかる
あるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかる
のくるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかる
一さうんこ 酒のさうんこ 明るかも。さうぐるかも 神也

一さうけ元寺八郎 ぜんかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかる
一さうあるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかる
一さうもさうも
一さうず 流石
四身 狂人也
十三絃の琴也
ぞくんかも
あらぐれさるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかる
ざるくのかも
ひるとこるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかるかる
一さうて さうで也
一さうじ 女人のかも
一さうれも 箏也。常用
一ざれさる ざれさるかも
一さうすうん 龍鐘也。
一ざうじら 雑支ホ
一さうよ 蜘蛛 ひるまも

一三史五經 三史へ。史記漢書後漢書 五經ハ
毛詩 礼記 左傳 尚書 周易

一さうまうた さあるをてみめや

一みたのをち みたのの天皇菖蒲のうづを
ケ。武徳殿ニ行幸ス。内弁 外弁 管絃の
めし。文武百官献菖蒲 内侍女房人殿 食饗
を群臣ようみて。一献終て 六府騎射ハ
一さうーげよと同んやさうーも
一さうやうちいさい祈也 細く 許
一さうーんて おまくと同ーもさとも

一さうくさうくされつ〜 うづくへも
一さうけ。遠ざけも也 一さうけるたすさ人の
ことのめやしはとうこ也 一さうだ 裳のさうた
万復也
一さうーこ
一さうーもるうーこ
るれとも
一さうーるべき人ぐいの外。
一さうーるうーこぶそも
紀の寿也
一タ紀
ゆたとも
ん也。変化の物よもそれさんゆ也。されとも
こいたのびのうさるれ

一されさるやうとゝ　ちやれさるもざれうこの歌也
一さくれよ　うつてふとうふるもてふ。うとうふるもてふ
ふこいふ河也
姫也。一説さしめさ　一さゝゝひゝゝへ花　動
きられさる　動ふ　きゝられぢ源氏のゝ一つ
一さるべさ　ものつうてもうきたる　封也。すゝる也。
のまをなるゝ　一さんの守　ちのゝ守
めぞ　前播磨守護也。ちのゝ新　桑意地物桑
心の桑也。水石入道也　一さゝゝ法　去ゝ也。
ゝゝ也。力葉ゝとゝ　ゝひのさゝゝ法とあり

一さゝゝへど　さゝゝへゝど也　一さゝゝあるゝ　河罪
一さゝゝ　ゝゝゝ　さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一さゝれゝゝ　生　一さゝゝすきゝゝ　ゝゝゝ
のゝゝゝゝゝ　一さゝゝゝゝ中法也
一さゝゝゝゝゝ　高ゝさゝゝゝゝゝ也
一さゝゝゝゝゝ　ゝゝの河ゝぞゝゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ源のゝ也
一たゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

山までいこめ給ひをと。坊中將の勇あり〳〵とをみく〳〵しかも。今の山伯馬のあるれば。家とし
ほの入山也　一されこの人へる　たれ覆
當時よ地をうひ志〳〵ふうたさの人也
一さもに　小青也　さいあて白さをを也
一さ〳〵ちづひ　髓　莊子ぷやをさ〳〵ぶひ也
一た迫命姉ひごのうねへ　鼻のあう犯人めべし
一さもぶ〳〵ぶ　花　此一段の詞は後にあり。妻
美ぐり　求つむ　めて志〳〵る也。ぐ〳〵しくあの也
一さりや　されぐ〳〵そといふ詞なる也

一寧樹　ゆうり　參澤　法は賀行事　延喜十六年。
新古院法皇の十四歳行幸保忠つ其時參
條大夫弁
一糸賀のるぷ出の下ぐ也。元此
花のくん　弘像寺南門よりうる廊也。
一さんのうち　弄
をゆ〳〵ぬのる也
一　此詞は辯事　一さ〳〵ぬ〳〵のきれ此家
ま二百よりるぐ〳〵ぷ　花今集ぷ拾遺
さぷちのをいはめて　紋　ハ一女
めてをとり〳〵る拾也　ぷ〳〵をり拾の二をあるを拾

のごとく。唐お長衆こそてこそまもるもあわぞそれし
下ぐさねうへのそこ海をど唐の綿を用ふる也。掃
のうへ。ぬさは面白こさうへ。れさに。藤芳はうへもう
けうこの也
花鈴文ト宮ハ去年ちるへきやいと秋野の末
よへ結よりうへこそ。則明年ハ雅行のうへ
へ。弄鈴文ハ代は一度うへも結こ。朱雀
は位よりうをあて。鈴文のト宮ちるべし。
鈴文の起ハ。崇仁天皇廿五年丙辰三月。依神宮
詔宣奉祝伊勢国五十鈴河上ニ八神ニ皇子

倭姫命ニ令看ハ各祭宿是鈴文始也 河海要
一鈴院 淳仁天皇。弘仁元年置鈴院。内ハ皇女
有知内親王 女交野為鈴王。神支式云。凡天皇
即位ニ賀茂大神鈴王仍簡内親未嫁者ト
一さうもうぐうう 神うの憚のんや
一鈴文のたまつのうさ たまつのうさとハ伊勢
けうさのやさうめられて後。内裏の夜殿のをを
して。初て鈴文よりうへ。もうこそ。
ゑハたまつ。初へハ御へハ。教隆流云。伊勢
へうさうせ結りんうそ。三年齊之同トいうもうわ

ちまた人間畜生ばかりにあらずや。仏道は
たゞ墨子ばかりの。近道なり。楊隈はまた墨子の府あり。西園
うるゝ一町ばかりにて。近道なり。楊隈は東。廛屋
とて冊ぬりなり。今絶えたり。或説云。墨子の
うまれたる所と云々。孟津

一三月　四月　拾九日　墨外

一三月　十九日　墨外の手中墨外
随行者　十九年間　任轉蓬　在昌賦　十一月中長至
後三月　墨外遠行人。若為独宿楊梅館冷枕草
床　病身文集　一釈迦年尼仏ばかり　弄金

一剛仏ばかり禁ぜざるべくのみや
一さくひとさとりて　たゞ仏云公卿　殺王命不越境
一さと　幾瑞ゆゑ奇怪ゆゑさとりて
一さの所つくへ　女ゆゑ　或説溪　皇女殺ゆゑ
親王手女ゆゑのよりて　おのもの　者ゆゑ　仏法
一さの所ゆゑ　殺の字ゆゑ　愁殺ゆゑ　化
きりつくへ　とられへ　めぐらへ
一さやうゆゑ　愛ゆゑ　ゆゑ　源氏の故院をば愛
こゝろ　ゆゑ　老ゆゑ
一さ所ゆゑ　花園ゆゑ　ひとゆゑ

てとゝ云こゝ
也 寺 欽 ゝの 額 さゝ
一在 文 中 橋 の ゐ と ば 為 つ か の 勝 と ち こ め 行 也 。 在 原
業 平 ハ ゆ ど ん め の ゝ 。 あ ゞ 在 文 と ゝ 也
一 さ ゝ ら ゝ 此 ち ま ゝ 者 れ 也 衣 の 裏 こ こ き 蕨 芽 か
ゐ と 。 橋 久 と ゝ 也
ハ 法 代 一 度 。 欽 院 ハ ゝ ち 勇 ま 脇 あ れ ど ち ま ゝ ら
一 さ ゝ ゝ へ り て ま と に ゝ ゝ ら て 也
一 さ 風 ゝ れ わ こ め ゝ ぶ れ ゝ さ 童 ハ 汗 袴 を き 行 れ ど そ
ま と ど め ま て 祖 ど ゝ ら ゝ さ ゝ ら ま や

一 さ ら め ど ゝ ぶ ま ゝ ゝ く 猿 系 め き ゝ ら と ゝ ん 也 。 猿 系 起
ハ 聖 徳 太 子 秦 川 勝 ま 仰 て 作 六 十 六 番 面 ん ゝ ま
内 裏 紫 宸 殿 ゐ め ゝ て 舞 を ゝ ら て 時 ち ま ス
其 神 系 字 の 神 字 ま ま け て ゐ 付 て 申 系 と い 也
一 さ い 人 才 人 也 一 社 の ま ゐ を ゝ ゝ 家
試 の 日 ハ 長 幼 と り て 人 の 種 性 ハ ら ん
め 也 故 ま 冠 者 の 者 ま 。 学 ま 生 ち 社 ま 壁 ま 為
ま 後 ゝ し ま 也
一 さ ゝ ち ゝ を ま す ゝ ら
弄 さ ゝ ゝ さ ゝ ま ち ち 也 一 さ ゝ ゝ 社 ま を ち ち 社 や
や ち ち ら ひ 為 ら ま へ て 橋 ハ 面 内 裏 ま え び 為 也 。 ハ

移りかはるすがた紅のあやめ咲そろふる色ぞやうるはう
けうとき也　一さらとり物のうちきは
名をとゝ月ぞ　おびけうとし花
一さらぐ〳〵ず　さらうちゆとぞ　ぱくぐずうきあるし也
一さらそゝ　舟の漕来也　屋敷のあはひ　懸の懸
あるど也　一ゆりあるうれへと
又月よ八人は逢ぬとゝり　一さらぶうきれ　菖蒲八面
青裏紅梅也　一さゝれのうゝれぐろ〳〵
はゝ奇のうちゝれゝを引ぐへてゝり
一わまゝ　唐のまゆは　おまゝ情ぞくはおまゝと

書ぞ八月ぞ　おとゝをゝとうまろふるとて女八ゝ
ゝてひろべしとゝり　一さらべさまゝちきみぐ花
大まゝと書ぞ　乙御八ゝる也。時　法師也
一さゝ紀の朱雀院　兼平は門世代者八宮多帝と
新朱雀院とゝる也　今朱雀おりまゝゆへゝ家の
字をゝゝる也　一さゝ〳〵ゝゝゝゝゝる也
一さぐれゝうぐの古万葉集　古万葉集　法師
さぐゝる〳〵ぐ愚案　古万葉集ゝて別る四奏ゝ
ゝぞゝうゝゝゝゝ　古万葉序あゝぞゝ
詞云　ゝれ世中ぞちりやゝうゝとゝれぐ代ちゝう

けつはのみどく人くの奇をうさあはめて万葉集
とちぐけてぬぬくみよつてぐれぐる紙わうといふ文の
あくしさにてひてうみべさへうちぐ 略 溪流
はれ門のは撰ん
唐土人也さうふ唱奇 一さうふ唐土人 唱奇の
よぐりのひ時えるぬはてたぐれ
ちどふてとも也
女を涙よとひうさつぐ櫛の縄也 一奇 結ぶ中文。
一さうふのは堂ゆて茉所伝 見松風 奏源氏の建
立栖霞ちるはもろふ茉所伝命をいのゆ也

一さうふうはうさやう 家勝王経 金剛般若壽
命経 河 一紀ぐを男結ゆも
男子の賀入後。短命の例多 花名 照宮公 貞
親十七年。男子賀入 信公。延喜十九年。男子賀あるて。七年歳ゆて薨
さて。公例をあれば。多紀るつてゆめ
ゆるさ氏のうも一さものみ社年 物語
初也。名琴大師 優る。拾云 到 法陀安養東
還 嫌 織 度人天 心ふ
一さうしのつま 双紙の所ませぬのをうさる

いとり
一さきり　一さうぐん　後三条也
一さうぐん　一里と云也　藻原宮
八根名所　一ちくまりさう　社の金仏
一さうぐんのみち　うるべのみちあうまも也。
神社のあめべしあう　茅ぬのパ　嵩のとうくれまひ
しとりうぎ　ぬくパ　あつとうすれうと　ぬん也。
中ねんよ　源よあひ　ちきんをちうとめべし
一さくちやう　鵜杖也　一三条殿と　殿ごとにナ有
はくうかれ　樓のうへ　人と云奏よ　たのあとぶ　ちの
おはいん　ぬ　とうりしうそ　ぱ　あ　つ　ぬりつとも云

一さうぐんまんとある　藤井と　廉　鳴　ぬ　ぬとい也
一さうぐんめやあそ　ぬ　ぬ　きん　　　

清行也

一さうの院　源氏蜻蛉の巻にまゐりて後うをあつる
ゆ也　蜻蛉の天皇たゞ芳寺より道世ふ沈してまゐり

一さうひの別當　房上人と云別當八右系なま
るべ也　たゞ系うを也　禁中あてい房上の別

當左大臣ちどゆべし　弟也れをとるゆゆや

一さうへし　ゆの不盛より入れてゆでりて盛を
懐中して退出也　それをさゝ西と云

一さゞゝうふ　あゝうふさゝいくとゆゝう祇

一さゝゝ柏のゝゝ　白柏のゝゝ新をゞゝゝゝ

一さゝゝゝく　雑事りくゝ女房れりもて行ゝ
ゆ也
ゆゆゆゆ也
ゆ也

一里ひゝゝ　上藤ゝゝ
一さゝゝゝ　四所の人詩

出ゝゝゝ都と云ゝさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝく
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一さるびるる星ちれるゑ　身家一太　迦天　吹敵　野三
群牛引　積休河
一さ面ゑ　桂好
一さうん　さうびうんのん
一さうぬうれ　不去別
一さうやく　雑役也　若芽　絵角の八濁也。若芽へ
盗也
一ざけ　邪気也
一さうじ　ゆうて　徒下也
一さくびやうし　筋相子也
一さうさ　桟敷也
一さうさ　けうぞの心
一さうか　き
一さうよ　あうめが　ゑにつうてそれはとれ紅　隙

うてちうさうとせぬぞうけはまきうろ宵あうぬせ
一きうさ　法式也
一きうう　ちうう　清也
一きうさ　ゆうひ　祖後よりはめてもこうろうう
とぞきうてうきうゆうろ　又笑うろうもも
ふ有ようろうべし
一きりつぐ　麻糸舎と
桐壺とうせ。又舎の一せ。弘徽殿　簾糸殿
宣耀殿ちぐ　ゆうて　行馬道　ぎうきうれど。
あううれはうさをうろうせ。又舎ろうへ。桐壺と
滋糸舎。梨壺と　無ハ　香
舎。梅壺と　雷鳴壺と　襲花舎

こうの也。ぞれを大内よりとる。桐つ
ぼと云也。源氏の母御息所の位のつる所也
一きしゝくうゝ四々。一きさいのゝ宮 后宮也
一きやう 鄉食也 俗よ振舞とゝる名也
一きびと 稚日本記 かさるとゝ也
一くさみゝく 一本のくれなゐ草也 ゆゝ也
ゆゝ也。ゆゝ三昧よりあて法花の三周法花也
一名祥天女 仏の春屋 ちゝ屋也
一きぬのきるひ 夜をひとへのきるひ ハ衣
ぞゝ海とゝる所よりとゝる所べ

一きゝゝゝ 男をうちゝゝ今れば
ゝゝやゝ 大ゝ中れゝまぎゝゝ
一ゝゝゝ 板をゝゝゝゝてゝ
をゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ 水鶏
一きゝゝゝ 隣家へゝひゝゝ何也ゝやしゝ女の
ゝゝ 一ゝゝゝ寺 栖蘭山
一きゝゝゝん 儀式 官職也 ひゝゝ
いひゝをいゝゝ 年 お田 紀ゝ行ゝ

一きやうゝゝのうゝゝけのこと　故常陸
のゝやしたたくも　燒基　唐逸　撥上　撥鬢の
ゝ
一きさたとも　聖河
鬱河　森河　の　新也　表　悪　本　后　后が
ねもてゝまも　后とのゝふ　べし
一きくとゝもてゝたれ　ゝ　河　遊頭
麦　嫁　撰　女八のみそ　元良のたゝのゝめよ　平
笑ゝ　伯　けゝめ　きの　花をゝぎゝてとき
一きさたゝのふ　中　多　ゝ　ゝ　表　つがのゝも
一花のゝん　中　ゝ　ゝ　ゝ

一きつねのすがうに　鼠鳴松桂枝狐蔵蘭菊
義
八重あり是ハ黄ちりて一きんまち　云義絵所
在高名録　泉女巨勢金岡云恵云義也
一きぬひのかさり　松風の宿ちりぬるを
れうまつけの和名あくちれば　元あへぐ女の装
束をつけ〜ぬ〜也　うつかの桂乃装ふ女乃
物装束つけ〜ぬ〜ぷ　ふんゆて書る
一きハさけく　さちりくまつさも
一きんぢ〜ハ　波菅也　一きさ〜元の女より外ハ

一朱雀院ハ外戚藤原氏の時　行幸上
皇宮　例天長十一年正月二日　仁明天皇幸朱
雀院　但母后内宥謁太后于柏原　見本朝
王記
肥前国松浦郡鏡神社　一名宇佐小菊　凝承廣
継霊也　又鏡山も神功皇后の御鏡作て在
とあり　後山といへり　是ハ後の神とあるべき
あやまりの説ハ松浦名海同社也　こゝへ分て
八石清水八幡と同躰也　こゝ写し給ハ後の
神ハ二の義まつべきにて

一きすくの人のすくやうや

一喜春系　呂也。五音ハ呂律ようつをそ。

喜春系ハ郭鐘淵の系也。平調ゝ也。

用るものや。可為弄人。律の呂よりるるや。

呂律ハ

香ちどり　ちづ人也。屋上人のするや

一水切てづるゝ　水面ハ向ゝの方也。南面ゝ晴雪

とゝろかや

高砂　物合好ゝ変やゝ

一宜陽殿　日華門の北や。紫震殿のつゝきや。中宵の

一公忠卿　号滋野井弁　光孝天皇出源

竜宮をゝき給ひしの別面　花

世上の家　女房とゝのゝ。ゝゝの時ちど

人ゝ。ゝ。ゝ。

ふるとものんもの。礼記より四年を拾て仕とつりもの
ぞく 柘木今年丈六古られ
一幻 唐穆宗八毎夜中花開
一本のめぐりよきちやう
一きちど 海棠如べ
八重頂帳
一条 八夜 夜。往還を浴さ
一条 ちるくて岩のうちもち
あもと。あぐりハ何とうはこうとはこうとるりぬ
一条 八夜のあくしまする鼠のまびるまべ
一条 とのんもの
一きくめまるれあり 柘
花ハ大条。をくるく春の中条。それもそうるへ
ぬるまじさもの 一きんのふ 琴弾也

河今年天暦三年の春童の女法名ありて。九条右
丞相の法如也。延喜門の法女。勤子内親王八則九
条度の宮よりまいり。延喜の法門
の。勤子内親王を給へる筆の傷をな
ぞらしるもと。今のまれ絵。六条院の女三条なる
ぞうしし琴れ稽古云ちもるるもり。弄琴の系
ら也絵。名ぎりとりつぎ絵也。び 仏 花ぬる
一きせいたとこ 碁聖。倫前掾良利肥前國
婦郡大村人也。出家して名寛意。為寺院
度上ち卯。考ふ法望山ふ。ものの対はとも法

けうう。大和物語よのをゆうり。碁のことゆうに
ゆうして。碁聖といへり。延喜十三年五月廿日。碁
聖奉勅仍碁式二献之云
一きしとゝく　はせの岸也。堂を尼とゝゆうり
て。我と尼をこさんとゝゆうり
一きるゆづを　菊泉也　日本記　伊弊冊ゆるのこと
つゆ入のよを。燭火のゆうひゆうみゆうり。そ
れをゆうの字舟ゆうの字ゆうてゆうれ
一きをゝゆる　競也　あゝゆふ人也
一きさゝげれ　后よ二歳人ゝゝゝゝゝゝこの

笑の量也　ゆ
一ゆさふ　交加と新ゆうめゆうひもゆるゆんん
一ゆびゝの命婦　翻鬚ゝゝゝ矢をいゝゝゝこと
ゝゝ和ゆるゆうゝ矢を弟すゝゝゝゝゝに
ゆうてゆびゝとゝゆう。命婦ハまの世に内侍の司。
織物をゝゝゝ中ゆうゝ。昔ゝ命婦と号ゆう。
后に已下の女也。殿人ゝゝゝハ下ゝ鷹のゝゝゝゝゝ
賀茂ゝゝゝ命婦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一ゆづ　夕の日也。夕陽也　万

一ゆきうひ　もうつのもの　一ゆきうの分　うまのしぎも
若布よつつ河也　ぽうるるとゆきうるるつ也
一ゆいうん　逆云　一ゆへうゆへく
ちさうしゆ　紙也　ちうも　一ゆうゆうのん也
一ゆつもよひとうく　流のうかをあつりのうを
うも也まへようかをうし　袖ちどみて
うしまふめべし　一ゆつう　弓絃也
一ゆはひう　鶏也　ひうきん也
一ゆくてのはとはつあでま流のとうも　のつる也
一ゆうけてゆうゆて也。　鉄砲の義也

一ゆうのうもうく　うるくうくうきは。ぬつひとうも也
一ゆきうきうれ　ちきうふうう宮也
一ゆうーいう　紅紫ぬうきうをと禁条どうう。ぬうき
きをゆうーうとうふ。袋をうきうかも。制禁ふを
よびすきうも　一ゆうひうき　んゆうーか
きも　会由形也　一ゆし流　由也たのふまて
ねとれ糸をもうるも。ゆうんあううや
一弓のけう　弓結也　強弓　弓結也ぬれと
たたはまうひてきうれうも。ぬ流ふ表の元
のうんあうも。ぬ弓を　勝負ふうも。ぬうふん也

一ゆうてのうけて　後鳥羽院　家国忌部祖天日記
遊木綿者　日本記　一ゆうてすき　木綿也
ゆうとゆうとゆうも。旧事本記云。以天香久山之天日
蘿懸為手繦　古語拾遺云。以蘿葛為手繦
とゆう
きうしゆうとゆうもの
ゆうとゆうとゆうもの
一ゆうさまろでし　宮園也　一ゆうくうとくうくうも
刻晨院　詳也　天台山へ菜を丸とりて
取て食し。一里ばかりあり。仙女　遣羊年史

と如て。旧里ゆれば七世孫ゆ逢とゆう。劉晨院
肇二人也
延喜帝行幸ゆきゆうきゆうゆ
一ゆうあくうゆう　くうくうの受れゆう
一ゆうけき　ひゆうゆうきゆう
一ゆうきゆうつきゆうの名　ゆうゆうつきゆう菓でこの新
ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
ゆうゆうゆうとゆうゆう
ゆうとゆう結ゆうくうくうゆう
一ゆうしゆうゆう　由拝也　ゆうゆうゆうゆうゆう

とハ相ことも也。琴の行ぶ仕也。弄四之

一ゆゑよしハ祖父のゆゑよしなり。祖父

ゆゑよしなりあるに。ゆゑよしなりとも。

れば多者とめしておくべきなり。

一ゆゑよしやうぐんなりに　天興善人吾妻鏡右将軍

墓草初秋紀在員是ハ右将軍保恵のゆゑよしなり

多治見左兵衛尉平良ゆゑよしなり。

ある。今あるべきなり。ゆゑよしなり。

優義ちゝ物ゝ。邪見のゆゑよしなり。

節初遠。ゆゑよしなり。

へくらの山新多。又ゆゑよしなり。唐名ゆゑよしなり。

といへども。物ゝのゆゑよしなり。

一ゆゑよしなり。ゆゑよしなり。

ゆゑよしなり。河覚

一ゆゑのゆゑよしなり。

絶物ゝのゆゑよしなり。

まゝ。ゆゑよしなり。

て。ゆゑのゆゑよしなり。

一夕北斗　敦高　貧者利夕陽　一面ゆゑよしなり。

ひとへゝゆゑよしなり。

小荷ハ摘沼ゆとゝゆるぬべし　ハ矣ありてまきめ
ゆへゝゆまるゆとも　一ゆゆるのみ沼　牧沼ゆ
也ゝあゝひゆゝゆゝゆゝ

一めくらしのはなを誤也車此之ゆゑ法ふかきゆゑ
一姉法ものくらう　はるかなる事　郡高屋へ妙法
　　ちゑ村ちく　　一めうとくちて世伝ま
　　　　　　　　　一めくめ　目ゆひ也
一めくらめ　　一めくらめ　　一めくらめ　　如くまくら也
一めくつぎくらひ　西京拾二院又雑ゝ中此侍身
勤行　一名継義時　こゝ今来親王家又ゑ名注
武ゆ定親王嫁娶之時　名継　以下後二万之禄
まゑふ聖人の記ゆ　ゑくらゆ自ゆ　ゑのゆくもと見ゑ
　　　　　　　　　

あん妻腫の瘍と物忌今まあるこ延長七年より宮ろ
也宮より忌とろくろく近ちいあとろくろとて不
審ちくも　一文ちくの一文懸ぶ八藤
中にくろぶ絡ふくもむすふ八湖をろぶ萩八表後ろ
一文のうちうめくんろ人　寛平遺誡番之人
必可以着在簾中見之以義也也て河海より宮
の河なり文より遠ちろといろ花名必の字ハめくぶ
しそうるふまづくき時ろうるもぶ絡ハ中まろをてめく
まづくき中ろ男くろり　一みやをれ　ちやをん不と
ろもも文衣のるやぶ花ふ絡うくろひていづれを

ちくうやをを不ろくを也ぶくを絡やをくをまいろうふ
少くちり　一みうゆひ　びんつくも
一みうくうくく　花鮒ろ　一みもくくぶちに　うびくを
くく絡也びんの髪を耳ふくもうめを表
一みくは　操　ちくずぶもうめ也ぶくうくめを也
一みくくるくく物げちくく　官位のあくを絡ふをいろり
一みくくふ　ひくくくも　一みくげどの　花遷殿花
蛾ちびく義遠不をといろ　一みうびろく　ふもくくあ
以ふ扶をを也　一みれのほどるく　小蘇
八ちくくくくのるくを也　一みくを花の松　花おの松明

也。魚まつとをも
吉野と金奉山よりかぶ月氏稚名也。なをるハ富士
の峯所弥勒也
一みつとがさて　弁ゑもめれど勝ぐまろ。背ぐまろ
二の膳こがりめぐろ中に鶴まどりて三勝をを
ゑろづとくも
なまろ者也
一みやくのく名者仏よ
一みやくゆさて　文八楽
中の人くくくんとも
一みどきやう　牧庄行傷の
とだ也　勢ふのとをきやう
一みてとヌあるよ　ゆくて宝ちれがとくぐ。ぐろの

中はやうもれば。夜ゑまろ。ぐれて清ゑもまりとをも
一みつの夜みて今一ときさ　琴詩酒のもろ也。今ゑさ
へ酒ちろべし
一みろしまいろちんとて
勢ろは勢清ぐろしをあびなろまををろし
まいりとろも
一みをんんは酒のは酒あ
と。勢後ろ人ゑまをくさとも
一みうちのの人　花今宴ぐはりもとりれたびんよ
ゑろ人ハぐ系のきあろ也。ナヲレ家ををろて後候ゴすと。
ゆうちろ共人とを也　弄みうちさとハぐあのちを
しをいろ也　花ゑ勢後牧庄家田

一みてぐらのこと　衣裳也
一みたしだるりはひきてて　簾を引こる也
一みてらのくるぐる　檀紙也　ぞうのこと
一ぬたくり　毎年定まる也
一みしいなくあるはうちみし　かまくこと相帝あること
はしのるる也
古墳何世人正識　姓氏兼名化粧路傍土　幸く春
草生　天
一みるほどぞきづ　ものの
也　ケツキ　ようもべしぬ本記は妃の字をみのとうあるぬ

まるはぬんめとまびに　一ぬうめ　あるまはぬ
一みやこんくんとも　帥内大臣伊周公　幡引ひ
そこにのりて　母ふあひ　ぬてぬ　ぬ
ぬてぬにぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬぬ
ひあて
衣　檀あまる　荷也
はぬ　児とけてのぬ也
一みてのは　手綱は門ぬ井ぬ厠ぬ是三逆也
一みてくまあれかとはぬ中ぬかとんぬ

一右はぢんのたゝまをんさんくんれ下づくえ　天徒斉合右
方洌濵流机浅者下机。浅縹浮文織地紙
云花今象右流ハ流の甚よ入ら。花ハつ
うくきゝれらゆみゝら。何木ゆてつらりとハ
えずせんくうハ流のあゝ紀をゑ下机をつくまら
おき　ハ下机めしけつ地紙のまゝ地ろこまの塔也
ゆひのゝこは花ゝをくゝゑるゝゝ也。河海よハ
ゑくゝのゑゑゑてむまびゝるゆゝまゝれゝうゆづ
ゑゑ。ゆひのゝくゝはゝあゝくびむすびゆ
一民ア大病ゝゝゝゝ行　葉朋

親王二品ゆゝをゝくゝゝ一みしゆりの家ゝくゝれ
ちくあゝ汁巻ゝ式ゝゆの姫ゝゑゝ槿ゝゆりゆゝを
る也。平ゝゆゝもあゝりと対面ゆゝてゝくゝゝ海
院ゝて久ゝくゝゆりゝれゆ我ゝ人ゆ。年潔ゝてゝふ
るゆも昔ゝ加ゝるゝこゝ忘ゝ花のゝゝゝゝゝゝゝ
んゝゝ也
一みゝゝゝて後ゝ絡みゝ
松風ゝゆゝゝゝゝゝゝゝ

康子内親王皇女村上帝内時弘徽殿女御
けるに九条右丞相の西ひてまゐりを給ける例花
多之

一みかどの御あさを給ふ
へさしへく 時 同又節とくめ給ふ例のゆゑや
一勅又節とを仕よりとうるゆゑ
見よ云云

一みさりのうすやう 六位の人々のうをうこめや
一みかるのうちよまどくつる あらをとる紙也
一はあしらりよ 足をさすゆゑ也
一みかむじまや 殿上人と。殿上食をするに。有だろ

つ紙ば水澤と云ゆつけの飯あると用ることあつたことと
へて也。澤と云ハ澤 馬は水。人々は酒とも
は用ることをもてめてことをくくするに嗜さうに花
伝物の委曲をくしたのくも
一みかるびうくまのとりをすて膳貢する也
まもとりつる紙ふむ義也
一みゆさ
一みくくらは上達ア ちども 為ようづくひのへべつ
さくらのはくくひどる 本ア門の記 書 紙 親王の
つ着地猪布 衣及襪 式 紫木蘭 小 襖 餌袋
今案是八王弟の 餌の袋 也 ばりくさ

の指の文のごとくなる。袴も四ぢ八尺六寸南地のさぬ
ぬきとをとさるべし。鎮ゑの下にはきて。
さるきぬのうへにて長を出すべし。冠養嚫冠
をさるべし。仁和荷河行幸。行平中納言。
飼のうり衣。鶴と文をぬひてるを。王卿の着
袍のうへ也
一みどのあるうへ　延喜目
養形幸例也。法皇は必まさかの袍なり。中一のひ
はは。主上と同さるべし。河　延喜四年十月九日大
井行幸上卿赤地文袍黄袴深色袍文行風儀
儀法皇まさかの袍着さるる時は主上赤地文袍をきる也

一みあるうへ　尺令也
本は天子のはるをきをいみ
ぢちちぢ云同也
一みどりさある中に河　之種。
黒方伯法梅花寛教伯記云春八十多加給之
べしとかんべんをとやうとぞ
一みあれ　ちあれは也依の別雷神をうまれしを
云ふやうさて此生をとも書。賀うちをあらはす
有ふ所なる也神雷へ御とは也をとれる
さきちと云ふ有とぞ。日本記云。非聖生其
中者或此穢。多のあの八日と云穢日と云也。此生の

八作鍋はあるところぞ。条は法師なるべし

一みちの法どうそうにてくるまよりまいりさしてさ 遊

ぶのうへの形は鞴なる海とあるれさるとそも

一みぶしにあのうそひのはさ院のうそひ 法厨子なるべ

歯一人須賀ノ滝仏女 謂猪飼仏人 御代ホ

之彩也 呼 六条院のそのうもは法厨子なるの猪

飼のはさとは四事とあるはやう一動法厨子な

八主上の法膳を流るさるるもそれよりもそれさ

気物組ちるべし

一みちどれるぶりあるやう

一文武 朝覲行幸は帛袷とあるさんくと三宝

と孫一流のうるさ

三男唯一心を祈る別法のことりらればうるさ

るんをそるれてあるべきにあるさるもうそ

一法殿法華殿 殿とは戸の法面の脇よりうるや

一文の授位 中文の文るどりへる彩也院の屋と

もを中文をもとりけてうめ仕人なべし

一みぶちるぎんのちも 法の男をるげとの法俗て

この御ものてちるもそされぶちぶりとさるにりけど

とりひさるんも

一みげとりれ生系ハ水宮

とハ生ぶとりそんさるもそとうるぬとハ法乃

心はうしろめたのみや。萩のトこそ〳〵さとなれ
そはぶ者のこゝをそなたよりとへてとへりぞ茶山若狭国
名所也。是ハ只今出を迎た馬四十匹たゝのむまつゞ
き六郡府の官人 六郡府と八たゝと郡府た
た濃ノ府。たゝ五郡也。是を左右馬けゝさ
六郡府と八つゝ也。ゆゑ六人ぬべし。門ノ左右
院へ参る仗馬也。之例河海花毛ニ委略之
一みやび 風流なるをいふ
一みくしに 絶入 琴をひきをと奇進也
一みやまぶるねぐ〳〵 けゝとと深山ふかゝ山ふかゝ深氏

とゝと名ゝ名ゝ女ニ名ゝを花ゝたゝへゝり。河
果名ゝ名ゝ名ゝ成ゝ名ゝの美名也。白名ハ鳥ハ一名也
一みちきれとゝを 六条院の堀乃西のをとゝ。
此ハ二条ニ又禁中をとゝいふ事
一はくゝれとゝハとゝ 若ハ花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ
来の百人也ゝ
いゝるハいゝれこのゝ
戸とゝハ民戸をゝ
ゝもいゝ也ゝ
死場ゝいゝゝゝ也。
とゝなるく花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ
一みふ 時 向ハ花ハ射の戸と
ゝ也。一説戸ハ民戸也。ゝ戸ハ百
ゝゝゝ

一みとせ　ゆきとうくてぐろさじさも
一みとせ　ちあくさきりはくまでてぬうこれとのんも
一みとせ　くびやう　ちりはきりんちとてんぐくひ
やうハ　脚れのるめべし　一みとせ　あきくめ　白
系天沢引と云へたる　遊女の遊
ぐ　光　者ハ　ぬ人　ちぐ　商人の妻と　ぬて　家ふ　拾
とよりよりんせ　系天　見と　写てた　遊の　耳と
あきくめくるとと云ハ　伏　今　絶　国　天　琵琶　法　処　聴　二
仙　楽　耳　皆明　とりくりきとりけるや　河海
光　鳥　図　之

一みとせ　ちりくてぐろさじさも
一みとせ　ちあくさきりはくまでてぬうこれとのんも
一みとせ　くびやう　ちりはきりんちとてんぐくひ
やうハ　脚れのるめべし　一みとせ　あきくめ　白
系天沢引と云へたる　遊女の遊
ぐ　光　者ハ　ぬ人　ちぐ　商人の妻と　ぬて　家ふ　拾
とよりよりんせ　系天　見と　写てた　遊の　耳と
あきくめくるとと云ハ　伏　今　絶　国　天　琵琶　法　処　聴　二
仙　楽　耳　皆明　とりくりきとりけるや　河海
光　鳥　図　之

歌業の三方八月本の方とうりの家をとくはるく
ぬてとハ家ハ虫の新ぬれハ蛭のるもとのそくんも
きれとあるくとするも　一みとりふたとり　夕　者　ぬて
ぬてぬふくふむくるとるぬくとも
一みとせ　見　絵　也
とのこ　九年　て　移ふ　ものを
年　ぬ　対　ふ　ぬ　息　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
一みとせ　ちりくてぐろさじさも
一みとせ　ちあくさきりはくまでてぬうこれとのんも
一みとせ　くびやう　ちりはきりんちとてんぐくひ
やうハ　脚れのるめべし　一みとせ　あきくめ　白
系天沢引と云へたる　遊女の遊
ぐ　光　者ハ　ぬ人　ちぐ　商人の妻と　ぬて　家ふ　拾
とよりよりんせ　系天　見と　写てた　遊の　耳と
あきくめくるとと云ハ　伏　今　絶　国　天　琵琶　法　処　聴　二
仙　楽　耳　皆明　とりくりきとりけるや　河海
光　鳥　図　之

一みとせ　ちりくてぐろさじさも
一みとせ　ちあくさきりはくまでてぬうこれとのんも
一みとせ　くびやう　ちりはきりんちとてんぐくひ
やうハ　脚れのるめべし　一みとせ　あきくめ　白
系天沢引と云へたる　遊女の遊
ぐ　光　者ハ　ぬ人　ちぐ　商人の妻と　ぬて　家ふ　拾
とよりよりんせ　系天　見と　写てた　遊の　耳と
あきくめくるとと云ハ　伏　今　絶　国　天　琵琶　法　処　聴　二
仙　楽　耳　皆明　とりくりきとりけるや　河海
光　鳥　図　之

月ぬべし。ぬりの堂の志ゐ。法華経の外と月くさり。
一年 ゑんの日蔭のつくゝうをて。ぬを結て付るゝ
を明の名食の恵名日月の光をこれ海ごとゐ
こぐとりをせ。ゐゝり 一三をせどりまるゝ
ひ何ゝつくて。花名唄花ゐ三ひろゐ三年を
こめゐゝりゝ。ゐの官位ゝ付。花名唄花ゐのお遠
也 恵素ひ何ゝ素の八ゐゝ寄りのひてうゝ
ゐりゝんとつゝのゝまゐ。ゐでのゝゐとゝゐるゐの代ゝゐる
しさやうゝゐとまめやうゐるさ海ゐとゝろうゝを
つゝまゝりのゐるゝ三とゝせ。ひりまるりぬとゐさう

ゐでゐゝやうゝゐこれが素ゐの年数官位もきれを知遠
ゐ。花人のゐふゐゐこぐ。ゐ
一みくりあゝとて ゆぐちとやさびつくゆさくの
足の名ゆくゝさとも 一みやうゝれとゐ名祝
解ゐ。結素稀花ゐゐとゐゐ素ゐさゝてさぐ
ゐりゐや 一みゝぐきゐのゐゝゐりて
ゐて中へ入ゐゐをゐゝり一みえゐゝゐゝゐゝ
とゐゐゐゐべし 一みそさもあさき 父母
のゐとくゐ名をゐゐりゐゐ変ゐれば濃くゐゐ
ゐゐとも 一三ぐゐつぐ三棟四棟也

一ハ車ハ　中式の嫁娶の礼義ゝや
一ゝゝゝ

あること云也。法花の経を般若心経と云よ。上にて
引云ことあるべしはしるべき也
一みあるべ　水漬也
　　はしるべき也
一上ぞめうしなれど　上臈しさも
一しうしうさ女房はめれど　京家のまうしうさんも。
はめれとハ源氏のはめれとも也。ハ星よりうへさ我家
中へ星をうきてハ使よつりすとんうべし
しはるべきれども　法るを塩竈と云

一しげんちうさ　きびうちうんちうさとも也
一十二あて元服　人生十二を一期と云。武士年冠
礼をうる。和漢の例　一しげいさ　相無のうう
舞也。源景舞也。舞ハ所の次也
一ぢねんりう　一つうひの新年　拾伝家
一ぢち　実也　一しんうて伝ぢて也
一しもく　屡。数也　数をうさめうこと也
一しれ物　愚人ぐちちうんも
一しんぢん　寝所也　一武士のうう姫ぞう名
ぐちなりし奇　はしるべき奇　拾遺よんてぞ。ぞ。あり

の事をすこしれぬと攫乃表をよこぱ山附をよみて
つくりされうとみくさうぱそうと槿欲院こうも
一のめ 衣あ事さ面をこも
一しうくこれくらの色ーうきさうすあこもきの表
一しうねさ人人のいふうをさうめをぱきうねさ記
一ぱきうとぐ きてすいうさ面も
一ーびくぶ引 ものうさめをさきうけにぱくる
引うけてきる物也 褶うもとも
一ーをんいろ 紫苑色のさめをうすりめ裳
やぱきをんうこぱ面ハ藾蕚ハ萌黄也

一きうくこの表うけ八介ハ丸指正出表。多部戸名声
紐正時一白ぬハ表のなく色也
一ーうさありをうする色うすあハ系也白さあ
りをのさめをうする色のうりさをきうる也
一ーのぶ事 彩る生きうこも
一下げいー 下敷引也。度をもつふまつりとも。
たたに度也
こめれうる也
れうんも。年うもと拍をれうをこも
一ーハぶきやこ 咲病也。りさのうる也

一ーうくめれ ひくく
一ーはどこめう 表ハ分

一ほうこうこうつ　ものを切て　ほうこうこうてこ
てんはも　ものそこちひこうはもこうも
一ものて　紙ドうんも　一しぞきて　ものぞたても
一しぐく　詩手も　手のちるしも
一はたに手　盗汐間も　一位下のくい　四位下加
陪も　位位下とこうもこと　ほいは加陪とうもこと
官をすむる　ぞれは　ハ行　孝ちぞれは　の例
生之
ものとの　ぞの　ものちぐくいんも
一しつとものぐ　引て　花今　集ものハ　裾も　裾も

衣のすそを　ものも　研　出　衣よりてされして　裾を
引　治も　一しんのされのくぞうへのも
花のとんむまくぞ　花　襖の日　勅使　こうも
深　袋　を　持　を　馬　ものはうう　鞠　或　和　鞠を
用　ポロ　を　をつるも　一しぢるども　女車　よ
掲　ものるもの　例ちけの　のれども　これハ　絶　ものびの
ムまてけうう
一しれさとううさう
ものもうもうもべし　一しものそれしう　弦
参　を　冷霜　花　車　とりしとあるを　白しと
くさくうぞぬけるものぞ　ものぞよる

一さうの船ク泊連日本記外ざ海まあひしらひ
治とちゐと
そうろう人ゝ也。又ちくふひべと。宣本まる。
朱振人れ。本の美ちどうさあつむる。殘のめ去
ゆのかも
一一魚とにあそりけさ
敵軍也漢付也
ままし
一一らぶほめてあり人て
也河光源氏太拾。在納云れむしゝを見てゆ
よ源居をしくられ。右永赴論不人も。配流
の宣旨をよろこびてた遷すゝ也。今の源八海を
恐て。ゆれと殺れよ。蒙古を攻るゝ。蒙古東

征の法をゆくられ。風霜人変異し如何ゝ。又
行年中納云も世義ゝ。花菅原おわ西後た
大臣の太宰府よた遷をゝれ。ゆ。おゝの原彼
国へ左ゝされし例をもてゝ。略之
一一やうぎんあてあけられをゝるひのよ河。聖廟
宰府れ下向之後。不動は精進をあて。絶夕法花
経を令持法ゝ。
一二の里外故人心　三五夜中新月色　二千里
外故人心　一一をゝるこうひゝん人の
ひゝるやうに史記曰　趙高欲為乱忠群臣不聽

乃先設驗持鹿獻於二世二世笑曰丞相誤邪謂鹿為馬問左右或默或言馬以阿順趙高或言鹿者高陰中諸設鹿者以法

秦始皇本紀

一邑霜後夢　漢宮於室月前腸　昨夜のん故舟

一一のみちの夏

を分るる袖を忍やつ[illegible]

一一らさしは海　海の[illegible]

と人秋よりへ[illegible]

十三日　夏[illegible]

河孝經曰[illegible]

一十三日　八九十三日也。面白くも也

一合三位　此抱信今世よ不[illegible]

一十四日　海月九日を[illegible]十四日善[illegible]

日阿弥陀海月尺迦　金仏者行之味也。[illegible]

ねよ二度だりのちぎりとこ[illegible]

一一[illegible]

一[illegible]

雲を次排[illegible]

[illegible]

[illegible]

一一つ[illegible]

一四位よりてんと親王

のよい元服の後源四位下に叙せ。源氏元服のの
初の源氏乃同例よあらず。故に親王のよに准して。
四位に叙し給りんと云ふ所なれども其沙敵あり
しも也

一史記 百廿巻 司馬遷作 一式部 韵 四韵とは八句の詩也
唐に勅撰なるべし。式部丞 唐 一勅八省の式部
一式部丞 つくさのみ式部を河延也 四年七月九日に
記 昌泰 月廿三日。式部省奏 省試判文其列及第
者二人 以下略之 前試に勅撰とあり。延也。應和。
康保 ホの例也

一法花経 観世音寺別
在 義 ノ 法 ニ 法 滿 擔 逆 義 国 観世音寺別
當見万葉 ニ ハ ハ ハ の名也
一しらずとも むらづくハ ハ 也 泊り
ものつくをそうべし。ふりハ 稜 也 仕く
つとハぬるとも 水よりとハ
一ふさ ふさ ふさ ふさ ふさ ふさ 河 細 系 揚
の細也とありもつぐさちれば。細也と云 河 略
しもれ。腰尾延縮也。腰よさしさ物也。唄
白さ ハさぬのるもや 一勅 合蹠
一ふほ ふほ 一 ふほ 法也 一 ふほ

をちらとつゝみたるもの　一しゆうとく　宿泊也

一しゆうとくこゝろかけたるこゝろもえりよ

こゝろへえりへこゝろやうたうくをぐこぺ文字づよるもの

一十三日よハ河原へ　河原より出て解除するもの

一はらえ　一つとゝふ河原こゝろぐめつきをとひてぞをこゝぬる

一つるね　一しげこゝとこゝれぬ　勝

日加次ゝへ　ゝぐこゝ

どゝ　ゝこゝ　ゝこゝ

と　ゝこゝ

例のこゝ

陽成院は加賀寝殿西敷出ヲ三間立螺鈿

今あ系出上は加賀ハ二条院すてをこゝろ

一月十日　月笑ゐれども

ぱちぐのゝ　ゝを略のこゝ

一しんてんのひんぐ　ゝりて　呼　西のこゝ

面ゝ　鞠のこゝ　相撲ハこゝ

今ハは　ルス　ゝ

ゝ南のこゝ　寝殿南むきと未

しゝこゝ　資雅　ゝ

けこゝ中ゝこゝ

ゝろゝや 略之

一ろくうれうろ萩とたう

やたさして 東極萩うさするもたるも。他人

もうてゝこらゝ此人のまひよりさすもまこゝろ。

呼河海より人もとうをとうゝ。角之。人也祢宗之新。

家ゆてハ左極也。此の宗此まに。砂鄉 角之人

結もと新ろ。ゝ。ゝ之人例ゝ。ゝ陰渓ゆてハうゝまし

ゝゝれ。ゝ生。ゝ。ゝ。ゝ

一うつくしき中のもとハ
和琴琴の二の弦。撥曲なれバ音素よ俊へ
きをさうむるも　一七そうの法服　法師
所服　孔雀　唄　散花　堂達　山七僧俗者也
一しあがきのだらなるもとりへて　五衣の下まき
がさねをするかいきめとりへり。西文抄に云。上腹
者也　衣下　袴　袍　俗　下袴　袴　袴
一しでの山　千手経　死天山門集鬼神
一しやくちやう　仏名沙三夜錫杖　沙後中也。
あれ祝云とよめり　行門
一のみつことも　酒孔ハ

一しきしつ　白氏文集十四紙　白紙　彩
ゆ是　是　詩　是　書　経　年　展　縁　身　病　今　自
開　有　生　蟲　魚　鄭　紙　奥　白　奥
紙奥　夜奥。白奥
一ものべをし　鄭　内者ハ
くりてもつくりてもつくりてもつく

一寄ぎぬ　中ぎのうきて　およぎぬ　八幡
神ぐるまとも　一寄　おてるや　ぬれてるハ
級題　日本記　是ハ方丈の寄とも　ささと引　出入れ
ふるとも　ふてふ
一ゆゆし　うきぬ　舟へ
とゆひ　ことゆ　ゆまうそ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
一よろこん　太政官　政官也　上官と　官　官　官　官　官　官　官　官
一うきぶり　あやぶり
一ふきぶり　彩羅也　一ふきぶり　あやぶり
やきぶり　ふやぶり　ふやぶり　ふやぶり　ふやぶり　ふやぶり

源氏九十巻第十七

ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ　ひ

一ひさぶり　永一両　一ひさぶり　袖をひさぶる也
同也
一ひろ出てちん　勅書　一ひとらぶり　一須長根寄
もろもの也　一人のみぶのさあり　楊
春長一群　とある
弁妃　ひとて　姫宮　宗位　ひさぶり　ひさぶる也
一ひさぶる海　源氏を朱雀院　ひさぶる也　九

して。[illegible]
一ひうろ石河 [illegible]子院 [illegible]国皇子。敦慶親王号三条
光宮。好色無双之美人也
一ひさうれんの左尾 引入の大臣とハ。烏帽子親の
也。蓑の上れ父左尾也。加冠の人也
一ひさうりのつうされたひま [illegible] 左尾れ馬
とハ。[illegible]寮の[illegible]馬也。[illegible]人[illegible]の[illegible]
[illegible]の被髪也。[illegible]
の[illegible]乃光とうとうけて[illegible]
一ひうりゆへづけて 河 由付[illegible]

一ひうう[illegible]
一[illegible]
[illegible]八[illegible]
[illegible]
一ひさうもれ 長[illegible]
一ひうへうづ 若い尼[illegible]
[illegible]ずうれ尼とひて。喝食[illegible]
[illegible]
つとあり
頻歳人のもく時[illegible]
一ひそうあう 舌出 河
[illegible]

むすれぱ口のまゝをひとゝ云也

一ひぐらさゝるり　此句ハ名所を入るひらゝ様。
　袋束（サウヂ）をゝ引くゝるひて。やとらゝる称也

一ひさゝうぐさ物のくゝひゝ。机帳（キチヤウカケ）惟（ヒラ）也

一ひくゝやごうと　生蹟（ヒタキ）。何ゆへとも知ゝこうる也

一ひとやゝとゝるゝめ　人まゝるをみて知ゝる也

一びんゝるゝ　各様（クヤウ）也　一ひぐゝさゝいつゝゝの　松木（ヒノキ）

ゝゝゝゝる　極（キワ）也　一人ゝとちり　源。官（クワン）位ゝるど

ゝゝゝゝのてゝる也　一ひゝりゝるゝゝ　ゝゝゝゝれ

ゝゝゝゝ

ぶつくんとしてつくちひさくちいさくなる
ことをいふ。海の和なれば波なし。
さくもつてのくくくくのとくくくく

雖沙也。ひくすくなを云回ノ名

一ひくさや 火燒屋 神供ノ〜〜ヒ〜〜ル所也

一ひくけ 河邊 河ノ邊ノ叩ノ所ノ。中ノ方ノ所ノ

一ひぐさ 草ノ名 草ノ名ノ所ノ。紙ノ名ノ所ノ

一也

雷鳴氷降 大雷極ノ所ノ

一人のみぐさ 毒ノ名ノ。傳說ノ古文ノ

可腐ノ一也 毒ノ名ノ所ノ。陽ノ名ノ所ノ

一也

琵琶 ひきてノ所ノ。師ノ也。琴ノ自用ノ所ノ

一人のうめを時 うゝ世中ノ所ノ 漢ノ高祖ノ

祖ノ風ノ人ノ 寵ノ所ノ。趙王ノ如意ノ所ノ

ちそうんとを時 白ノ名ノ。張良ノ所ノ

ちうとをとれし 張良ノ所ノ。四皓ノ所ノ

りてをとれて 高祖ノ所ノ。朝ノ所ノ

たなかどちきて 羽翼ノ所ノ。惠帝ノ所ノ

とのまたたなかて 所ノ

一ひちぐふ 土ノ所ノ

一ひまある 中ノ所ノ

の名をちくせる 根ノ所ノ

ゝ
脇要とあるゝゝ也

一ひと奏ゝ 呼 徴 配 蕃

一ひぐりいちゝんのかゝゝす

ゝゝれけゝく 天滅 音 合 龍方 洲濱 紫檀 れ

蘇芳 ト れ 紫 綺 地 ゝ ゝ 今 菓 龍方 絃

紫檀のゝゝ入て 蘇芳の木 そつれけゝく

ゝゝゝ

の蘇ともいふ。中ごろまでもとうさ屋のは
ゑりよ作られり。略之はひるもをやうつる
一ひさごにとりうさふ　雅楽寮ハ御酒殿の
うめてちりとゑんも　一ひうの名　河
為手　古語拾遺　法社の条ひうの条
鬢ようする也。若し鄭也　一ひもも〜めく　厠ものさ
やくるが若ひ。ひとまも〜とうも
一名歌　鶏冠花　〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
一ひのはうも　ひるのはなれ　根のもとさうへ行也
一たのつうさにひとうわる官人　官人ハ将監将

曹府生をいも　一人はまくさうんとそい、哺
一ひうの川　日本記　反歌を氷酒ようて用とうり。
氷水是ハ也氷室同。ひやくうもる水な
一ひうのちうさひうきし　一ひうちもるする　一面
哺のはも。波立出ようる也　会心
一ひうりうも　平弾　一ひとりうてこうく　尖丸
をこうりうの奇とも　只猪とうも
一ひとうぐうのうく　柱の条ようる
一ひうぐうと　川切也　一ひうんき　雅令帯。令

を織付くる物也　一屏風四帖ようちれたる
うをあつめ。うちの所ゝとい。勅筆の絵也。奇ものあ
そびうるゝと云流をぐくのあやい唐綾をそまる
ゝる屏風也。ゆうみすんとはうみすぐる也
一ひさかたのうぐいすをめるゝる物也
一人つくり　忠臣不孝　二人の男女不更二夫
一日一夜をそもいむこと　往生礼讃云。中宵中
行中夜人。一日決戒處入金蓮　若等
一白髮ひとうれ　光長。源院の屏風し給二三年
始つねる昇龍し給ゝるもの。天の嶺八嶺

能ゝ戸也。ば夫ゝ与。年ゝ之ゝ九年也。ゝの年幼
衆ゝ而ゝ五歳也。六歳ゝ而ゝ九年也
一火とけちゝゝ　はな経　仏ひ滅度必薪盡
火滅
ゝ　一ひとを　氷魚
一ひとも　蛤蜆い朝ゝ生ゝ
蛤の喩ゝ
ゝて。ひとも
ゝて。有無ゝ
ゝ

足をうちちらすのこと

一ひげんのもとにて財宝を吉日をうらなひ

一ひこぼし　彗星　白ほうき

一人のふまうとうん毛はえたり　不魂香のこと

書文人をもて後漢武帝　耳泉　嬰　投良

方士をもて靈薬を合をしうて金炉の焚一

うぶ。ふの煙の中にまぼろしの姿みしること

一人なれ　他の浦　出雲の名所

一ひじつまのよ　聖人ちどれ世に埋り出る様なること

一ひさしぶれ車　庇ぶれ車　毛也

一ひらくげ　獺　鄰　毛車　一びやうぶのくろ　黄八

綾を人をうべし　一人をうまとと　元生丸

遠拝言　程度　一ひとのくこと　戸乃

ふてとうとう　一ひきあり　めぶちも

一ひもさし　歩安の紐をもつてれ体見えれども

夕人の礼義を　一人をうらを　波の

所を白ふ人をもてぶくらをものの人ちとの法也

一ひつじのあゆこ　屠　羊　歩支　唐土羊牧羊

食料のぞこて屠殺人に見こて行殺人に生こうびて死

地ちびぶ　毛と毒に　人のうむとこと　解　書

目髮見病人死然死

一人のまれとあくまれ。人の

もあれ私ゆとあれと云河也

一人のみどあと　楊貴妃坂唐帝ノ思ヒ李夫人去テ

漢王情頃

皆ゑ情不如不遇傾城後　白氏文集

一人ゑ　人形ハ水よちゑ寸物也

一ひと地のゑに　氷と六月暑をさゑあゑ用ゐ

ゑや河歩

一ひとゑ　きとしゑれバさ

やゑずーて立ゑとゑ人不知ゑ也

一水文のけぐ　女一文の極らひこちゑと

一人よとゑれ　人ゑら遂さゑゑ法花経或被逐

人遂ゑあり　一人のゆまどはさん　俳句

一人ゑ人ゑ若是ゑ法花経遠人應ゑ

一ひとぐ文　面藥ゑゑ　ゑ田尼

ゑちどれ剛文ゑ

て　毒本流ゑ　ゑ

一ひとゑぐーあやうう

あぶゑさとてゑうゑ　俗ゑひ俗ゑう

さ舟の勇士おゑゑうゑ勇とちぐんとを人。

む尼ゑとぐゑうゑん　おゑ叶ゑう

一ひとゑする　陵園妾拒城経日風蕭瑟。

とてすつ　ぢ　ぢ　ぢ

也。始もうとくるもうこう奇とうもう也

一拍しとうこうの寸は拍と云字をうこうもう也字

ちうこう又くちあるもの下紙の中まてわたに在之間

河也上ようきてゆづれも久きゆびりのへに柱不

可紙とのこ来ゆくうり一拍の清ゆまーこうほど 浪

のうくあつまうすようりて乱ゆ也

一拍つこ 表ゆてもはうこうまーこうもうに柱ゆまーこうもう

時。柳枝をけづりてはゆ冠纓ゆ拍忌とうて付ゆ

ゆのたに池ゆもの白紙ゆうて付ゆ也。古襴ゆ付

ゆ也

一りうまーこうはゆまーこうぶ也

一ものとのこれうく 是六姓ハゆるき人ゆれとせた

おとうへて安位ゆやしくぶまーこうあ人とゆ也

一ものとの根ざー こうへの根本の姓とゆ也

一文章生 儒者の知ゆき時の家也

一りや 博士也。おりやゆるどゆゆうゆ

一ものけ活ゆる。拍うけ活ゆうゆ也

一拍げちれゆこうざ 拍ゆるゆうゆ也

一ものくこうく かうこうゆ柱也

一拍のこうこれ 此系のこゆ也

一拍ゆるこおゆれハ ようそ

うう西海あれば也

一りうきうに大うち山大

酒山八行和ちよりうとつへど。是い樹軒はるをとつ

一りうきうちどーて おさちる人のくいくをと

拙稿ところ也

一りうきうにくく 呉中ようまうるこころ四人元

蝙蝠輪行熊りこうふべくて酔良やしんまて無な

細元

一拙ちうびちうふ小はを

知はづきまて大洋ふ人はをもつて拙ふする也

不淨をとる遠ちる也一りうこうあとわづれいる

くせたまづれ 漢かれ其所多野相ふ在

紂王府に仕援群賢才多事

赴配所之人不可勝言 白氏文集序より

一りうのづうとる 拙稿を絵よみうちり

一文をべ 源学ふ 源氏信元 元

一りうとよ 紀ハいそ できさ 中ちう元いかりか

どうへだ。只後中のき後一りうこうまはあうこれて

と秦始皇ハ。楚莊襄王のよりて即位実

ハ下よ通ぶて不生元元

一りうこうよハ元の元大うきに 晉石崇倫居

金谷に春花満林朝夕五十里後障一遠春不

遊ばしてはべ恐は是無心人 夫すぐれたる文 たれ地獄
云。桃園無門関 ものいはぬ門をたてゝ出入する人
なりとも。又拾遺集に。桃園は住けるあ
ち院と泊出ぬる是はたるる
一りんみんさきう 文人擬生 文人学文をする人
とぶらうなりと云。擬文章生
と云心也。文人とて詩の試あるも。たれのた
ゆくとへてと云ふ也。天のはたをても試を
一文人とめさす 呼一動 文人ハ儒者也
学生ハ今月及第すべき人と云ふ也

一梅の花やうゝちるど 文字を抜ける也
一すゝ花のうゝ
一ゆきはのうゝ 雨多雖在奥列二 ゆ将
うゝ山もゆ雪の関
あもそうゝひ。ゆ玉兵園のあゝうきとの
ゆひ。ゆ女郎の涙さ紅をすりとけるを恨て又
よめるゆ。ゆ雪みゝくゆ玉ゆ珠ゆ
ぎゝうゆ。ゆ玉ゆ
一ゆうゝれさ紅ぎゝう 漢ガ 天皇の代
弘仁八年 ゆ男女の衣服ゆ唐の法を用ゆ
ゆ。ゆ山ゆ雪ゆ河海図之

一ゆえなのの雛なのの屋也

一年若ト　ゆるゆる落葉を　ゆるゆるとは蓑を種の

枝ようのうるをいへり蓑笠なるゆゑ蓑也

落亂脱也　名ハむのまきうさとは女三女三

の乱ニ枝と云ん也　一月連ゆるゆるさ花

月連始て六通とえうるとゆるゆるとは

又仏ゆ親近ゆるゆるとゆるゆるとは女の餓鬼也

一年の稲　ゆるゆる　本源　牛蒡　蓮　盂蘭盆　経ゆ　ゆるゆる

一ゆのゆるゆるて　ゆるゆるは　ゆるゆる

一ゆるゆる人なかんや　ゆるゆるは体字ゆ也　ゆるゆる人　ゆるゆるとゆるて

のゆるゆる也　一ゆへゆるゆるを　ゆるゆる人　ゆるゆる

ゆるゆるゆる

又業内をとゝのへ万事ととのへるべし

一せちと兄をやうこと　せちの

もれ給へのんも　一せちのさとちくへてを

弘　立名ぬ日ちれば　みぞれ衣ぐへのんも

一まち海波　輪　嘉　まち海波の序也　ぞれ章

あり。南宮諸云山曲系和は時ぞ納云良峯

安世　新作義勅命下　作し年時　後勅改城盤

法　調　仏　詠　小野　篁　略之

一せちさめじんのうんめ　戚夫人うさめと

ニ　注よちくとも。今ちくられちる必あるべし

とのんも。戚夫人ハ漢高祖の妻趙王如意の母也。

惠帝のたるゆてありしを。立うんとをーらど

もつあうとるるーず。高祖ハ崩しまゆ惠

帝位をつぎゆて後。呂太后ハうれむしひせんと

て。戚夫人の服をあらそて。人彘と名づけてゆくやれ

中よをうこうてをうれしるのうーや史記曰呂

后本紀。太后遂斬戚夫人手足。抉眼。燻耳。飲

瘖薬。使居厠中。命曰人彘

一せーやうせん陰とうさてをせちやうとうむや。

畔　軟陰とあるも幕のやうちる物ぞるさ松ちどを

絵ようきて壁ようへて引也

一せぞ沈 昇下の河也。或ハ下宮ちゑとも。彼の

一せんくうき 宮ちゑうきも

せちきと云也

信ようぞくぞく云て同し一せきへてへて次ナの

関とこて作へ出われハ遠く永ハ遠やゝちゑ也

一せうえうをちて 遊遥也。おそぶるをせう

えうを云也

一拾改しまゝ天皇ハ元

服の後もいまゝ幼主の時ハ拾改と是と云。彼碎

の表をそまりて君ハ改をうへしなて後ハ拾

改をあゝためて。南向と稱ス。冷泉院ナ上ハ元

服ハ元。則ち信ようきて拾。なゝ元服の後。受禅の時

拾改の例ハ清和貞観六年ハ元服ス。同八月九日

忠仁公良房拾改の詔を蒙る。此例に準ずる也。

六十三の年齢ちゑ。忠仁公の例よりハ遠ざかる也

一四人しもめ 宮ちゑの名ハ拾改家ちゑ。

昔ハ院ちゑ。まとひちゑ。ちゑ形の宮ちゑ云

石集ハ中ちゑ。さう一せきうさうたぐれちゑ

窮者也。除目ハ品籍ハ。内裏の窮者ちゑ

ちゑ。ちゑへ。ハ下宮の元ハ。久ちゑ。昇進ス

ちゑ。ハ下の河也。窮途急 日本記

一せうちのの日うちのぎーさ様うけして 内のぎーさ
をうまを白馬を引うよ。先馬寮の次ハ下儀奉も
所儀式をうけーうみや。昔の名ものもを支へ
ハ。良房公の例をもて支へうる
一小貳任ゝゝ 仁徳天皇四年。始置諸国史生明
天皇養和元七月勅諸国守ハ云。四年ゝ限
但陸奥出羽太宰是云官国始自義前等
避在千里以五年可為任限云〻
一せうさうこう 文ちどけうゝ名ある也
一せうさいくと 小簀 一せんゝ名上ものぐんたちち

あさくにぐんのうちゝん也。ぱ祥をゝ也ハ茶挽也。ぱハ
ゆうゝ名ある所ぬへし 一せうさうゝ
朱雀院山陵のうちゝ
一せんさいうんちどゝ 壇の花壇也又漢年云ハ
をゝ。山水ちどゝ代ゝ
一せんぐのゝとぐハ 今のを紅ぱ。清性云をけて
ぎうと。ぱ仁忠文とひーん。昔東夷をういぐ
ゝ大将軍ちりぐゝ 細ありて。清性云の悪霊
ぬてぐゝ源を退治しるぱのを紅をけして
ゝゝも 河海抄

一せきでんよ　夕数蛍乱
一せんけうたま　河内か
よへせんくいとこそ。或ハくいたまとこそ。瞿夷たま
善巧日乙也　耶輸多羅之母位瞿夷也　羅睺羅母
羅睺羅ハ仏出家の後六年よ生給し所に
くゞひくゝこゝこゝ花　耶輸多羅をバ殃灯仏
の出世の時。瞿夷女と云故也。羅睺羅のワ多ム
こゝひけゝさゝゝとゝ。別の因縁あるべきゝやゝ
らバ法花会よりてゝ二乗成ぜんのさゝゝとひ
らゝそまの記別をとゞけあれし時我為法たま

時羅睺為我今成仏乙法為法の偈を
説ゆくゝゝゝ仏のはゝゝとハきゝまれゝゝゝとゞワ多
よゝひけゝさゝゝとゝくゝゝゝや
一せゝゝ　月の節よ歌時ゝも
一せゝゝ　ゝの方　おゝゝゝのゞくゝゝゝるべし
一せゝゝゝよ　松門暁到月能細白氏文集ゝゝゝ
いゝのゝゝゝ御ゝ
す
一ゝゝゝ　河ゝ人ゝ一すゝく　速く清くゝゝゝ
ゝもすゝゝゝ　一すゝて　邦の字ゝも

一すくえう　宥曜師。ゆゆしき九曜の行者なりとて。
人の運命を勘うるなり。でんりんくをのごとくに
見る
一すりたさくさくこづくさ
修理職とは。内匠寮也。作るくれなりやまあ
近江国のなかと。ゆうしんの池。河内なるはすくすりとこと
一すくさくこぐ作　好色をこころや
一すいかん　をいかとくこくこころなるあこいられる。法師
一すくさくこ　白ぐさくこも　一すくられう　くくくさ
うるんも　賜
一ずうやうこいひて　ずくらくとくくこあとくこずる

やうに法師の数僧をいくり。国衛　左国のるすと
ゑもとこるくすのや人のあこと他法のるすをいくり
一すくこつさ　すくこづさ　すくこつぐあくくこうべ——
一すべちく　般ちくや　一すくせ　ちあくせや宿也
一すくこづさ　すくこ名ちくこるるや
一すくくようちるくぬ。すくくようはすくくやをくくこうあ
はぐんそよちるくこ心とのるや也ぐちられてくくこあ
はめの遠近をあくくすや今是を墨一えあて
すあ雲とくくはとくや　一すぐちぐて　そぐちくて
はがくくちをくくちあくこ面也。んのくられくあぬべし

一すのこぶりおすのこえんまどやぶりえんまつ
こうとをいり　一すれちがすのうらも
一すまひ法そやし法こうえんも
一ずどちよ　能すまるやずんでとやずーとをを
一すくくくしくくまるれるをさををやずくうう弱也
一すしまるひらへすしへ移へぬさあやあ下の
くくひくくこをちうべさ法ぬやひっへとりり
一朱雀院の行幸　朱雀院とハ内りの内の法門お
りまず不法やせ。こ条朱雀ハ四町ハ遠られうと。
延喜の法ぎりハ。うう多法門を朱雀院とや伝ぎ。

多法門とハ寛平法皇をやせ。千月の行幸と
ハ。ものこびの賀乃ものべしぶ紅葉の行幸とてあり。
是をてうきんの行幸といへり。ぶ巻の中紅のも
と。紅葉賀ハ。うう　一するつし　紅ハまちる花
さくさくう。法皇ハうつも一すくれいよすぐれぬや
まぐれの新也　一ずいぶんつりあて　陽明。
法皇のへやせ。こまりうさ法也
一ずるよ　そうろ用ぬるーずのん也
一すほう　法法。行法　縁也。ぬの字をへぬぬーはと。
ちかうとも也　一ずぐの　もぬぬ也

一すさのうふくろ 遠さう袋也

一すいべい 作ちどみてすさのうの墨也

一すれこ えんとをうもてまきとのすれをわるべしまた

うるべし

一すずひらりすりくるる

えりのうらさきの所也 一条雀院行幸 朱雀

院のあとに行幸。延喜十六年三月七日行幸 朱

雀院 有法皇又十ヶ年ニ成ル事也 ちのぶ書

ちすさうるべし 此事ハ一院ごとしかまえ則寛平法

皇ちずらうも 相撲のは在位の中に一院崩御

のるかくさうへ 寛平法皇ハ延喜法皇ハ崩し給て

のちのうれさも侍あるも 一すさのうの

一すちうとしたうの結を 潔斧 ゆそ人ろを離給ふ

むも

一すくうの河 八十川 ゆれく

むくゆれハゆれくもも すずの河ハ伊勢のあるも

一すくうれ 神ちうさうひを 河海ニハ若捨遣を

引うまうり花 信吉 此神ハ往 すの舟をゆり給

ふ。神功皇后 新羅 を入給ふ。帰 舟を入給ふ時 舟の 鼎

ゆり。帰 石入 乃出 来 給ふ 結びにあやしき

風ふく 吹 うるとは 吹 うるとは みくさ

うり 信吉 此 来 給ふ 行 蔵 あ

づりうへも
ぬいはくとあらうるぬべし。
べ
大変。角なる物も
の順よりとれんも
ほうじの物も
ときそうん小ぬと鬱り泥
あうさよ地ぐうまけるに
じと人のつひうれば
れは寺そて表ぬけう
一すすきん
一すすの事れ
一すすの
一すすつさいを
一すすきまさたり
一すすきまり
一すすきまり

かけうたにまさへられ侍りしとも也

一すいきん 湯のけむりも也 一すぐ〜 行ひて 慢 行

すぐ〜 名のうつくしき所なりしと

そとも也

丁子染の少女 うつくしき花風也

一朱雀院の北門 あり し所 幸の後 ありし所 幸 八 花のうつ

ぶみてのうす

一すきの心を 右のよさてぞ

つまた今 来内典 外典 蝶 よ ぶ 愛 と ひ ら ひ ぬ り と

いへば。今 れ 拾 遺 よ い へ る ば。 右 恵 他 人 の 文 格 の 奇 夢

とをりふすまうつ こ ま も あ る 。 他 そ ん も う う

うすうべしん 漢 源 と云 八 梵 山 漢 迷 恵 山 唐

よ 地 て 地 て 八 方 也 能 地 を 出 す 八 方 。 合 て 十 六 方 也 能

の山 ちるとうそ ぞ と ん づ ら る も。 東 西 南 北 を 列

あり。日月 山 の 出 没 を あ り て 。 畫 夜 と 照 ら す と い

へり。此 石 入 の 夏 八 此 石 上 の 出 り ん と す る 夜 の 夏 と

いへり。ぞ〜 出 を あ る も て ひ そ く 漢 源 の 山 を 山 よ

とをそ いうべ る き 山 也 。 右 の ま ん さ ら る と 安 と 八 右 よ

つ ま ぞ れ い お い の ま ん へ と 云 べ し 。 山 の た た う 風

日 と さ ー 出 そ る 八 ぞ 。 日 八 中 ぞ 。 日 八 ま る よ た

此 石 上 の 北 幸 ま る て 。 漢 よ ま る と 出 ま ぞ ま

瑞雲の下より出て、そこ元あくまぬと
云へば、石入るゝ世界のごとく、
三ヘ、の山は極楽とぞ、ひろ
山とぞ、ひろき海、ようく、とぞ、あつ
ようきのて、海、とぞ、あ
多いちりきれ、あ、のうて、西をさしてゆく、
の、ゆ、樟さして、死の海、と、て、西方極楽の
岸、ふくく、ふ、ふ、ふ

一すきこうてゝ花すきすぎてとぼけたもうれうんもの
一すきゆよ　衛門殿（エモンドノ）の絶（タヤシ）のべ[illegible]ぽけ身[illegible]
きびぐ[illegible]ゝ[illegible]ひとこまあり人の　花[illegible]に
昔恋しらぬ[illegible]　一すもとちろ　八[illegible]
みとこうべ[illegible]　一[illegible]八[illegible]の眼
とゝう。ひあ[illegible]眼石[illegible]。[illegible]
ゝ。[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]石書と
一すきひゝと　作兵衛（サヘヱキ）　[illegible]年　[illegible]進（スヽム）　[illegible]人（ヒト）七
月十六七日　[illegible]　[illegible]作也。廿六日内[illegible]
廿八日[illegible]大月廿七日　[illegible]九日　[illegible]月廿八日也。

[illegible]の他[illegible]人と[illegible]集（スダク）て[illegible]ん[illegible]也。[illegible]八[illegible]
[illegible]ん[illegible]ぬ[illegible]
一すき　後者（ヨツノモノ）下人也。[illegible]人[illegible]
一すけ　出[illegible]也

一すき　多集（スダク）